

学生海外調査研究	
20 世紀のエキュメニカル運動におけるパラダイム転換に関する資料調査	
氏名 前村 絵理	人間発達科学専攻
期間	2016 年 8 月 1 日～2016 年 10 月 1 日
場所	スイス・ジュネーブ
施設	WCC（世界教会協議会）の記録保管所

内容報告

1. 問題の所在と研究の目的

グローバル化の進展に伴い、日本再興戦略（平成 25 年 6 月 14 日）の中で、グローバル化に対応する人材力の強化や、高度外国人の活用が唱えられた。また、在留外国人（旧登録外国人）の数は、1993 年の 132 万人から 2013 年には 207 万人へと増加している（法務省, 2001；法務省, 2013）。このように日本においても多民族・多文化が進む中で、様々な背景をもつ人びとがいかにして共に生きるかという「共生」が大きな課題であり、共生を可能にする教育が求められている。

ドイツでは、偏見に立ち向かう「アンチバイアス・アプローチ」を理論の柱の一つとして採用し、偏見や差別を幼少期から防止・克服することを目指す「キンダーヴェルテン」プロジェクトが実施された。前村（2015）は、「キンダーヴェルテン」プロジェクトの検討を行い、プロジェクトにおいてフレイレの「対話概念」と「意識化理論」が具体化されていることを明らかにしている。

フレイレ教育思想の重要概念の一つである「意識化」は、BCC（キリスト教基礎共同体）の活動に影響を与えており、そこでは、意識化、聖書の学習、礼拝、相互扶助、そして自分たちの権利を守るための政治活動が一つに結び合わされた。フレイレの考え方が非常に公汎な影響力を持ったのはこの BCC を通してであり、1971 年にグティエレスにより理論化された「解放の神学」は、この BCC からくる草の根の経験によって刺激を受けた（Berryman, 1984）。フレイレは、1969 年 4 月から 1970 年 2 月までハーバード大学で働いた後、1970 年から 1980 年までの 10 年間、スイス・ジュネーブにある WCC（世界教会協議会）¹で働いている。申請者は 2014 年度にジュネーブにおける資料調査を実施し、WCC が 1973 年に開催した「黒人神学・解放の神学シンポジウム」に関する資料から、それまで十分に検討されてこなかったシンポジウム、シンポジウムにおけるフレイレの発題内容、シンポジウム後のメディアの反応に関する検討を行った。その結果、「伝統的な神学が黒人・解放の神学に出会う時」（LeMone, 1973 : 177）と表現されるシンポジウムにおいて、無意識的に抑圧者を支えているナイーブな抑圧者に対して、抑圧者を支えることを止め、被抑圧者と連帯し抑圧構造に挑戦することの必要を訴えることで、フレイレがナイーブな抑圧者の意識変革を試みていたことが明らかになった。WCC は、キリスト教の教派を超えた一致、また諸宗教間の対話により世界の平和と正義を目指すエキュメニカル共同体であるが、フレイレが WCC で活動していた時期は、20 世紀のプロテスタントを中心とする教会一致運動であるエキュメニカル運動において、従来の教権主義的なあり方が見直され、抑圧や不正義に立ち向かう姿勢への移行というパラダイム転換が起こっていた時期である。そのため、今回は、フレイレ教育思想への理解をさらに深めるため、エキュメニカル運動のパラダイム転換に着目した資料・文献調査を行った。

2. 調査で明らかになったこと

2.1 エキュメニカル運動のパラダイム転換

エキュメニカル運動の起源は、ヨーロッパとアメリカの産業化によってブルジョワ社会が発展していた時代にさかのぼる。当時、キリスト教宣教は、現地の固有さを無視して自分たちのやり方を押しつける植民地政策と同じようなやり方で西洋（ブルジョワの）キリスト教文明の恵みを残りの人類に伝えることを目指していた。19 世紀末の「リベラルな国際主義（liberal internationalism）」という風潮において、キリスト教国には一致のスピリットがあり、キリスト教文明には総体的な一致がある

という確信があり、その確信に基づいて教会間の対話と協力が試みられたのである。当時のスローガンは、「この時代における世界の福音化 (the evangelization of the world in this generation)」であり、このスローガンは、初期のエキュメニカル運動の宣教的意識を強調している。純粋な宣教的・福音的動機は文化的・社会的動機と密接に結びつけられていた。つまり、この当時のエキュメニカル運動における一致とは、西洋キリスト教文明の恵みを残りの人類に伝えるための一致を意味していたのである。その後、第一次世界大戦やその余波は、深刻な危機の訪れと同時に新たな始まりをもたらした。帝国君主制の終焉によるヨーロッパにおける従来の勢力均衡の崩壊、ロシア革命、社会の世俗化、世界経済危機、ついにはファシズムの出現といった出来事により、従来のエキュメニカル運動の枠組みは崩れ始めた。

キリスト教と（西洋）文化の古くからの統合が崩壊し始めたため、1937年と1938年には、オックスフォード、エディンバラ、タンバラムにおいて主要なエキュメニカル・カンファレンスが開催され、教会の問い直しや、教会であることの意味について再考していくことがエキュメニカル・パラダイムの中心になった。第二次世界大戦後は、ヨーロッパにおける従来の秩序の崩壊だけではなく、アメリカとソ連という2つの強大な力が世界の覇権を握るようになり、長い間続いていたキリスト教とヨーロッパ文化の連携は終わりを迎えた。また、中国における共産主義革命の勝利は、現代のキリスト教宣教の歴史における野心的な宣教活動に終わりをもたらすというエキュメニカル運動への決定的打撃を与えた。

エキュメニカル運動は、この深刻な危機に、「熱心な神学的省察 (intense theological reflection)」によって対応し、歴史を「人類のための神による救済の計画 (God's plan of salvation for humankind)」という観点から解釈することにたどり着くことになる。教会の宣教的使命は、「神を宣べ伝える (the *missio Dei*)」ことへの参加であり、教会の一致とは「神から与えられるものであり我々の使命」であり、急速な社会の変化は、「歴史における神の働き (God's action in history)」に参加するための教会への挑戦として理解されるようになった。「キリスト教世界」は、「救済の普遍史 (the universal history of salvation)」という観点から人間の条件を理解しようとするようになり、秩序を維持するように作用していた初期のパラダイムの「空間的枠組み (spatial framework)」は、「歴史的枠組み (historical framework)」へ変化した。このように、「世界史」は、イエス・キリストにおける神の決定的行動という観点から、「救済の出来事」として理解されるようになり、キリスト中心的普遍主義

(Christocentric universalism) が再発見されたのである。19世紀の宣教運動の始まりから、1961年のインド・ニューデリーにおける第三回 WCC 大会でエキュメニカル運動の自己理解が具体化されるまでのエキュメニカル運動の発展は、このキリスト教普遍主義の漸進的な再発見として解釈される。エキュメニカル運動が「普遍性 (universality)」の段階に突入する機会となったこの第三回 WCC 大会は、西洋諸国以外における初の大会であった。インドは、脱植民地化のプロセスの始まりの象徴であり、民主的な後援のもと人道的社会の発展の象徴であった。インドではヒンドゥー教が主要な宗教であり、インドの教会はごくわずかな少数派だが、このように、いわゆる「若い教会 (younger churches)」が、対等なパートナーとしてエキュメニカル運動に加わるようになった。また、ローマ・カトリックからも初めて公的立会人がこの第三回 WCC 大会に参加している。

キリスト中心主義のエキュメニカル運動は、教会の再発見と回復のための運動であるが、教会それ自体を目的としての教会の再発見と回復ではなく、「世界を包括するキリストの救いの業のために選ばれた手段 (the chosen instrument for the world-embracing saving work of Christ)」としての教会の再発見と回復のための運動である。神の普遍的な救済の計画への志向が、従来の発展への熱狂に取って代ったのである。そして、キリスト中心的普遍主義の表われとしてのエキュメニカル運動は、救済の歴史と世俗的な歴史の断絶を許さず、全てのクリスチャンに、彼らの普遍的な信仰という観点から、「その時代のしるし (the signs of the times)」を検証するように挑む。来るべき神の国の観点から、神は私たちを、飢餓、苦難、貧困、差別そして抑圧に対抗し、幸福、自由、平等そして兄弟愛を擁護する決断せよと呼んでいる。クリスチャンは、それに加わるために聖霊の力がどこに働くのかを知らなければならない。また、暗闇の力がどこに働くのかを知り、それに抵抗しなくてはならないのである。また、キリスト中心主義と普遍主義の関係は、ニューデリーにおける第三回 WCC 大会からウプサラにおける第四回 WCC 大会にかけて行われた広範囲にわたる WCC スタディ・プログラム「普遍史の時代におけるイエス・キリストの究極性 (The Finality of Jesus Christ in the Age of Universal History)」の中心的課題であった。このようなエキュメニカル運動のパラダイム転換の最中、フレイレは WCC へ招聘され、1970年から1980年までの間、WCC の教育局で主要メンバーの一人として働くことになるのである。

(資料：元 WCC 総主事 Konrad Reiser の“Ecumenism in Transition”より)

2.2 エキュメニカル運動と教育

2.2.1 WCCにおける教育局の設立

WCC の設立時（1948 年）には教育局は存在しなかった。その理由は以下の四点である。第一に、すでに IMC（国際宣教協議会）、YWCA（キリスト教女子青年会）、YMCA（キリスト教青年会）、WSCF（世界学生キリスト教連名）、WCCE（世界キリスト教教育協議会）がすでに存在していたため、帝国主義的にならないために WCC に教育局を設置しないことは政治的に重要だった。第二に、宣教と教育の関係が崩壊していた正教会と細心の注意を要する関係にあったため。第三に、とりわけアメリカとイギリスにおける WCCE の教育思想がヨーロッパにおいても考慮されるようになったが、ヨーロッパの教会は教育を社会構造と同一視していたため、その適応は非常に複雑なものであった。また、教育は教会の優先事項にはなっていないことは確かだった。第四に、アメリカにおいて 1940 年代と 1950 年代においてなされたように、ヨーロッパにおいても弁証法神学（dialectical theology of Christian education）によるキリスト教教育への批判¹がなされたことも、WCC の設立当時に教育局が設置されなかった理由の一つである。

しかし、その後、WCCE がその問題意識を広げたこと、また、1961 年の IMC との合併後に WCC が教育的問題に遭遇したことで、WCCE と WCC の提携の強化が必要になった。エキュメニカル教育の必要性がますます明白になり、WCC 同様、エキュメニカル教育も認識され、理解され、支援される必要が出てきたのである。そこで、WCC は 1968 年にスウェーデン・ウプサラにおいて開催された第四回 WCC 大会において教育局を設置し、WCCE と WCC の統合に動き出したのである。

（資料：The Background of the Office of Education, WCC, Box No. 4235.2.1.1/3 より）

2.2.2 WCCE（世界キリスト教教育協議会）と WCC（世界教会協議会）の統合

WCCE（世界キリスト教教育協議会）は、もとは世界日曜学校連盟と呼ばれていたが、1907 年に正式にエキュメニカルな国際日曜学校協議会の後継者となった。最初は日曜学校に重点が置かれていたが、その働きは徐々に広げられ、青年活動、平日学校（day school）における信仰生活、学問、家族教育、成人教育、また信徒訓練を含むようになった。さらに、キリスト教教育は一般教育（general education）と確かに関係があると考えられるようになってきた。

WCCE と WCC は、イエス・キリストの福音に応じて、変化と対立の世界において、すべての人が神の被造物として十分に責任をもって人間の自由を遂行するのを促進する教育のあり方を模索する。エキュメニカル史における今まさにこの瞬間、WCC と WCCE は、教育分野において特別な義務を負っている。その義務とは、人類の未来を気にかける人々とともに、対話、共同体、そして奉仕に従事し、彼らとともに、人としての成長・成熟、社会正義、そして国際平和のために尽力することである。分離した存在であることはもはや何の意味もない。教育における変化が各協議会にその教育的視野と活動を広げることを強いている時、また教育的な働きのためのより良い一体化したエキュメニカルな機関が求められている時、そして教育的活動全般において責任のある管理実践が教会に求められている時に、従来のままの分離した状態であり続けようとしてはならない。WCCE の豊かな伝統を WCC にもたらすことは、教会の教育者（church educators）に、今後、キリスト教教育という職務において共有していく非常に良い機会を与える。

（資料：A plan for the integration of the WCCE with the WCC, Box No. 4235.2.1.1/1 より）

2.2.3 教育局の第一回協議会 報告書 “*Seeing Education Whole*”

WCC の教育局は、1970 年にオランダ・ベルゲンにおいて、「世界の教育的危機と教会の貢献（The world educational crisis and the Church's contribution）」というテーマのもと第一回協議会を開催した。11 カ国からの教会のリーダー、教育者、ジャーナリストの代表が集まり、現在の教育計画をユネスコの専門家とともに分析した。そして、WCC に対して、教会をサポートし、彼らの教育的活動を再評価することを要求した。この第一回協議会の報告書 *Seeing Education Whole* は、さらに広い視野が教育の再考と再構築のために必要とされていることを提示している（Kennedy, 1975）。教育局は、「キリスト教教育」「一般教育」「神学教育」という三つの分野を課題として扱う。キリスト教教育の担当は William B. Kennedy、神学教育の担当は Werner Simpfendorfer、そして、一般教育の担当になったのがフレイレであり、この三人の担当者は一体となって働くことが要求された。

教育局によると、自由な人間と責任ある市民の育成という教育の伝統的な目標は重要であるが、そこには曖昧さがある。教育は、「解放（liberation）」か「飼い馴らし（domestication）」のどちらかであり、中立的な教育というものはない。そして、人々への教会の影響も、決して中立的なものであってはならない。教会は、社会の意思決定過程における教会の政治的意義を認識し、自由のための教育に従事している他団体と連携しなければならない。

(資料：Seeing Education Whole, Box No. 4235.2.3.1/28 より)

3. まとめ

従来の植民地主義的な宣教のあり方を反省し、キリスト中心的普遍主義へとシフトしたエキュメニカル運動において、教会自体に重点を置くのではなく、「世界を包括するキリストの救いの業のために選ばれた手段」としての教会の再発見と回復が目指されることになった。そして、キリスト中心的普遍主義の表われとしてのエキュメニカル運動は、救済の歴史と世俗的な歴史の断絶を許さず、この世界における飢餓、苦難、貧困、差別、抑圧に対抗し、幸福、自由、平等、兄弟愛を擁護することをクリスチャンに求めるのである。このように、不正義や抑圧に対して立ち上がり、抑圧のない世界をつくり出していくために行動するというあり方は、フレイレの提唱する「預言的教会」、その教育的役割と一致する。

また、その時期に、WCCにおける教育局の設置(1969)やWCCとWCCEの統合(1970-1972)といった出来事があり、教育に関する大きな動きがあったこと、また、WCCとWCCEの統合に向けて設置された教育局の主要メンバー三人のうちの一人としてフレイレがWCCに召還されていたことが今回の調査で明らかになった。教育局は、世界の教育的危機に教会が貢献するために、教育的活動を再評価し、さらに広い視野をもって教育の再考と再構築をしていくことが必要であることを提示している。また、教育局は、中立的な教育がないことを強調し、解放のための教育を目指した。教育局において1970年から1980年までの間働いたフレイレは、この10年間の働きについて「教育局を常に代表して活動していた(Freire, 1977: 1)」と述べている。このことから、フレイレ教育思想研究において、WCCとWCCEの統合、教育局、そして教育局におけるフレイレについてさらに理解を深めることが重要である。そこで、教育局の設置が宣言された第四回WCC大会における教育に関する記述や、教育局がオランダ・ベルゲンにおいて開催した第一回協議会におけるフレイレのスピーチ(タイトル:「解放の証人(Witness of Liberation)」)や、報告書“Seeing Education Whole”のさらなる検討を今後行っていく。本調査研究は、来年1月にハワイ・ホノルルで開催されるハワイ国際教育学会において発表する予定である。

注

1. 正教会、聖公会、バプテスト教会、ルター派教会、メソジスト教会、改革派教会、合同教会、復古カトリック教会、聖トマス教会、メノー派教会、友会徒教会、会衆派教会、使徒教会が含まれる。また、WCCはローマ・カトリック教会との公式的な働きにおける関係や、まだ構成員ではない福音派やペンテコステ派教会との新たに発生した関係もある。
2. 人間の本性に関してあまりにも楽観的だったそれまでの神学に対して、カール・バルトをはじめとするドイツ人牧師たちにより「危機神学」(「弁証法神学」とも呼ばれる)が生まれた。彼らの神学によると、人間の内にある欲望によって作り出された第一次世界大戦後の惨憺たる廃墟という現実に立脚し、人間本性は言うにおよばず、彼らが生きている社会も罪によって徹底的に墮落してしまっているの、説教や教育を媒介として個人や社会の成長が企図され、それが可能であると考えるのは、全く誤っているということであった。そして、人間の救いとは、瞬間瞬間人間の中にはいつて来、われわれを再創造する神の霊に自らを委ねる以外になしとげられないという主張であり、教会の責任とは、この世の罪と悪に対して、預言的姿勢をもち、「正しい」「間違っている」ということをはっきり語りつつ、こうした信仰的決断に立って、再創造の福音を宣教することである(文, 1975)。

参考文献

法務省(2001)平成13年末現在における外国人登録者統計について

http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/press_020611-1_020611-1.html (2014.05.15 アクセス)

法務省(2013)在留外国人統計(旧登録外国人統計)統計表

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001118467> (2014.05.15 アクセス)

前村絵理(2015)「幼少期における異文化間教育」『お茶の水女子大学子ども学研究紀要』3, 61-70.

文東煥(小杉尠次訳)(1975)『人間解放とキリスト教教育』新教出版社.

Berryman, F. (1984) “Basic Christian Communities and the Future of Latin America”, *Monthly Review*, 36(3), 27-40.

Kennedy, William B. (1975) “Education in the World Ecumenical Movement”, *the Ecumenical Review*, 27(2), 147-156.

LeMone, A. (1973). Reports on a Symposium: When Traditional Theology Meets Black and Liberation Theology.

Christianity and Crisis, 33, 177-178.

Raiser, K. (1991) *Ecumenism in Transition: A Paradigm Shift in the Ecumenical Movement?*, Geneva: WCC.

ボックスナンバーとコンテンツ

Box no.	4235.2.1.1/3	The Background of the Office of Education Office of Education in the First Year (1969-1970)
Box no.	4235.2.1.1/1	A plan for the integration of the WCCE with the WCC
Box no.	4235.2.3.1/28	Seeing Education Whole -Paulo Freire : Witness of Liberation -Do you agree? Working Hypothesis-Office of Education of WCC
Box no.	34.5/14/1	The Purpose and Function of Education, Forth Assembly
Box no.	34.5/14/3	Report to the Assembly of the Committee on Education

まえむら えり／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻

指導教員によるコメント

前村さんは、博士後期課程において、修士論文で注目したフレイレの思想をさらに深める研究を行っています。一昨年はスイス・ジュネーブにおいて、昨年はドイツ・ミュンヘンにおいて資料調査を行い、収集した資料の分析を通して、フレイレ思想とキリスト教のつながりを明らかにしました。そして、研究をさらに進めていく中で、諸教会の一致を目指すエキュメニカル運動のパラダイム転換期にフレイレが WCC（世界教会協議会）で働いていたことが分かりました。そこで今回は、スイス・ジュネーブにある WCC の記録保管所を再訪し、エキュメニカル運動のパラダイム転換への理解を深めるための資料調査を行いました。重要な資料を収集することができ、パラダイム転換や、その当時の教育の動きへの理解も深めることが可能となりました。さらに、フレイレが働いていた教育局に注目し、その関係資料を分析していくことで、今後のフレイレ教育思想研究のさらなる発展が期待されます。

（人間文化創成科学研究科人間科学系・小玉亮子）

A study on the paradigm shift in the ecumenical movement of the 20th century

Eri Maemura

My previous study revealed the relationship between Paulo Freire and Christianity. Freire worked at the World Council of Churches (WCC) throughout the entire decade (1970-1980), which is in the period of the paradigm shift in the ecumenical movement of the 20th century. From 1st August 2016 to 1st October 2016 I visited WCC's archives to deepen my understanding of Freire's educational thought, focusing on this paradigm shift and Freire's works at WCC. The research at WCC's archives enabled me to have a new perspective that there was a significant educational movement in this period of the paradigm shift, and also enabled me to collect many documents for my further study.